



能古博物館だより

おとなになれなかった 弟たちに……

米倉齊加年



米倉 齊加年を偲ぶ

遺作絵本展

『おとなになれなかった
弟たちに……』

開催

- ▽会場 能古博物館別館1階
- ▽会期 4月3日(金)～7月26日(日)の金、土日及び祭日。詳細は8ページ参照。
- ▽主催 能古博物館
- ▽協力 まさかね図案舎

74号の内容

☆表紙 ☆ 1ページ

☆特集 ☆ 2～4ページ

米倉齊加年・遺作絵本展

『おとなになれなかった弟たちに……』

☆寄稿 ☆ 5ページ

蝦夷地産品を運んだ筑前廻船

小樽市総合博物館学芸員 菅原慶郎

☆お知らせ ☆ 6ページ

・入館者数の増減グラフ・日野原ホールで上映会・バスツアー参加者の声・企画展「私の8月15日・戦後七十年の肉声」の開催準備へ・主なグループ来館・友の会新入会員

☆協賛寄付(法人・個人)二覧と友の会・会員名簿 ☆ 7ページ

☆ようこそ博物館へ ☆ 8ページ
・館付近の案内図・福岡市内から姪浜渡船場へのアクセス・市営渡船時刻表・島内バスダイヤほか

※カットは絵本『おとなになれなかった弟たちに……』(偕成社刊)の表紙から
資料提供・まさかね図案舎



おとなになれなかった弟たちに：

一九八三年一月 一刷
二〇一四年九月四八刷

作 米倉斉加年

発行者 今村 正樹

発行所 株式会社偕成社

東京都新宿区市谷砂土原町三二五

電話 東京(三三六〇)三三二二(営業)

(三三六〇)三三二九(編集)

定価(本体価格)1,000円(税別)

ぼくの弟の名前は、ヒロユキといいます。

ぼくが小学校四年生のときに生まれました。そのころは小学校といわずに、国民学校といっていました。

ぼくの父は戦争にいました。太平洋戦争(大東亜戦争)の真っさいちゆうです。

空襲といって、アメリカのB29という飛行機が毎日のように日本に爆弾をおとしにきました。夜もおちおちねていられません。毎晩、防空こうという地下室のなかでねました。

(中 略)

そのころは食べものが十分になかったので、母はぼくたちに食べさせて、じぶんはあまり食べませんでした。でも弟のヒロユキには、母のおチチが食べものです。母はじぶんが食べないので、おチチがでなくなりしました。

ヒロユキは食べるものがありません。オモユといってオカユのもっとすいのを食べさせたり、山羊のミルクを遠くまで買いにいったて飲ませました。

〈 ご 挨拶 〉

能古博物館

敗戦70周年を迎え、福岡市出身の俳優米倉斉加年さんが絵を描き、文章を綴った絵本『おとなになれなかった弟たちに……』を企画展として取り上げます。「まさかね凶案舎」の協力で実現しました。

演出家、絵師としても著名な米倉さんは昨年夏、市内のホテルで急逝されました。打ち合わせ直後に倒れ救急車で病院に運ばれましたが、意識は戻りませんでした。死因は腹部大動脈瘤破裂。享年80。新聞は突然の死を「巨星墜つ」と惜しみました。

米倉さんは西南学院大学を中退して上京、劇団民芸で宇野重吉さんに師事。重厚な演技で頭角を現し、映画テレビでもこの人ならではの持ち味を発揮しました。作家の井上ひさ

あとがき

戦争ではたくさんの人たちが死にます。そして老人、女、子どもと弱い人間から飢えて死にます。

私はそのことをわすれません。でも、もつとわすれてはならないことがあります。

私の弟が死んだ太平洋戦争は、日本がはじめた戦争なのです。そして朝鮮、韓国、中国、東南アジアの国々、南方諸島の人たちをどんなに苦しめ悲しませたことでしょうか。それは私たちが苦しめ悲しんだ以上のものです。

そのことを私たちがわすれてはならないと思います。そのことをわすれて、私たちの平和は守られないでしょう。

一九八三年 夏

米倉斉加年

しさんは「知的にひねくれた人物像の創造については彼は本邦第一の能力を持つている」と評したそうです。

「一方で絵本作家としても名を馳せ、『魔法おしえます』と『多毛留』の2冊はイタリヤのポロニーニャで開かれた国際児童図書展で2年連続受賞しました。」

この企画展で取り上げた自伝的な作品『おとなになれなかった弟たち……』では食糧難の戦時下、幼い弟のミルクを盗み飲んだ自らの「罪」を告白しています。

弟は昭和20(1945)年7月末、敗戦のわずか10数日前に栄養失調で亡くなりました。

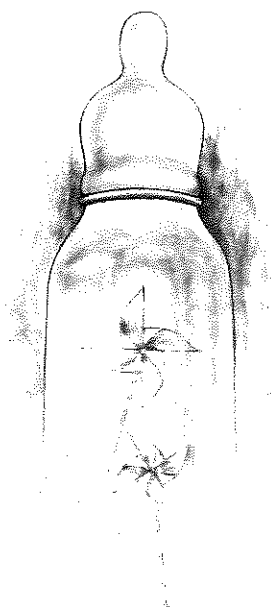
米倉さんは執筆時の心境を(あとがき)に残しています。

でもときどき配給はいきゅうがありました。ミルクがひと一かん、それがヒロユキのたいせつなたいせつな食べものでした……。



みんなにはとうていわからないでしょうが、そのころ、あまいものはぜんぜんなかったのです。アメもチョコレートもアイスクリームも、おかしはなんにもないころなのです。食いしんぼうだったぼくは、あまいあまい弟のミルクはよだれがでるほど飲みたいものでした。

母は、よかったです。ミルクはヒロユキのごはんだから、ヒロユキはそれしか食べられないのだからと――。



でもぼくはかくれて、ヒロユキのたいせつなミルクをぬすみ飲みしてしまいました。それも、何回なんかいも……。

ぼくにはそれがどんなに悪いことか、よくわかっていたのです。でもぼくは飲んでしまったのです。ぼくは弟がかわいくてかわいくてしかたがな

かったのですが……それなのに飲んでしまいました。



あまり空襲くうしゅうがひどくなってきたので、母は疎開そかいしようといいました。それである日、祖母と四才の妹にすばんをたのんで、母が弟をおんぶしてぼくと三人で、しんせきのいるいなかへでかけました。

ところがしんせきの人は、はるばるでかけてきた母と弟とぼくを見るなり、うちに食べものはないといいました。ぼくたちは食べものをもらいに行ったのではなかったのです。引越ひっこしのそうだんにいったのに。

母はそれをきくなり、ぼくに帰ろうといって、くるりとうしろをむいて帰りました。

疎開……空襲や火災などの被害から身を守るため、都会から地方へうつること。

そのときの顔を、ぼくはいまでもわすれません。

強い顔でした。でも悲しい悲しい顔でした。ぼくはあんなに美しい顔を見たことはありません。ぼくたち子どもを必死ひっしで守まもってくれる母の顔は、美しいです。

ぼくはあのとこのことを思うと、いつも胸むねがいつぱいになります。

母はいったこともない山のなかのしんせつな人にたのんで、やっと疎開(そかい)がきまりました。



(中 略)

ぼくたちがお世話になる農家(のうか)は、すぐうらの山(やま)が頭のうえにおおいかぶさるような山すそにありました。その農家の庭(にわ)に面(むか)した六畳間(むすむす)の一部屋(いっぺ)をかりました。家のまえの溪流(せいのう)にはとび石(たびいし)が対岸(たいがん)につづき、大雨(おおい)の日はわたれませんが、下流(かたがわ)の橋(はし)をわたって学校(がっこう)にいきました。

母は生まれてはじめて田植(たうえ)えをてつだい、昼(ひる)にだされるごはんをぼくたち(ぼくたち)にのこして、もって帰(かえ)ってきました。

ぼくたち疎開者(そかいしや)には配給(はいきゅう)もありませんので、母(はは)はじぶんの着物(きもの)をもっていき、近所(きんじよ)の農家(のうか)の人(ひと)たちにおねがいして、米(こめ)と交換(こうかん)してもらっていました。母(はは)の着物(きもの)はなくなりました。

疎開(そかい)してもヒロユキのおチチにはこまりました。となり村(むら)に山羊(やまぎ)をかつている農家(のうか)があるときいては、母(はは)が着物(きもの)をふろしきに包(つつ)んででかけました。

ヒロユキをおんぶして、ぼくはよく川(かわ)へ遊び(あそび)にでかけました。ぼくは弟(あに)がほしかったので、よくかわいがりました。

ヒロユキは病氣(びやうき)になりました。

ぼくたちの村(むら)から三里(さんり)くらいはなれた町の病院(びやういん)に入院(にゅういん)しました。ぼくは学校(がっこう)から帰(かえ)ると、毎日(まいにち)マキと食べ(た)べものを祖母(そぼ)に用意(ようい)してもらい、母(はは)と弟(あに)のいる病院(びやういん)に、バスにのってでかけました。

十日間(じゅうにちかん)くらい入院(にゅういん)したでしょうか。

ヒロユキは死(し)にました。

暗(くら)い電氣(でんき)のしたで、小さな小さな口(くち)に綿(わた)にふくませた水(みづ)を飲(の)ませた夜(よ)を、ぼくはわすれられません。泣(な)きもせず、弟(あに)はしずかに息(いき)をひきとりました。母(はは)とぼくに見守(みまも)られて、弟(あに)は死(し)にました。病名(びやうめい)はありません。

栄養失調(えいようしじょう)です……。

栄養失調……栄養(えいよう)がたりないために体(てい)が衰弱(じやくじやく)した状態(じょうたい)。

(中 略)

父(ちち)は、戦争(せんそう)にいつてすぐ生(な)まれたヒロユキの顔(かほ)を、とうとう見(み)ないままでした。

弟(あに)が死(し)んで九日(ここのか)後の八月(はつげき)六日(むい)に、ヒロシマに原(げん)子(し)爆弾(ばくだん)がおとされました。その三日(みっか)後にナガサキに――。

そして六日(むいか)たった一九四五年(しゅうごごねん)八月(はつげき)十五日(じふご)に戦争(せんそう)はおわりました。

ぼくはひもじかったことと、弟(あに)の死(し)は一生(いっしょう)わすれません。

(完)

蝦夷地産品を運んだ筑前廻船

小樽市総合博物館

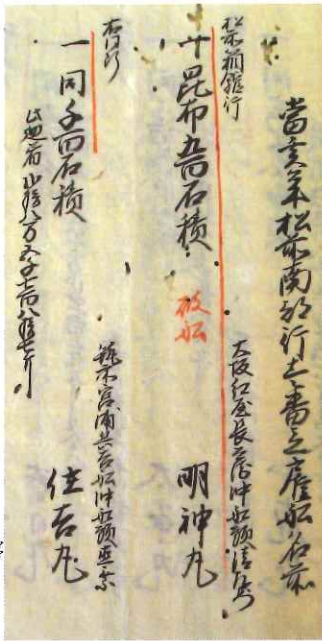
学芸員 菅原 慶郎

現在、福岡と北海道は飛行機で2時間程度の距離にあり、日帰りも十分可能である。ところが江戸時代には人的移動・物流の主流が船であったため、早くても数週間、風待ちなどで滞留する場合には、数ヶ月もかかった。

そもそも江戸時代に、約1、500キロも離れた筑前(福岡)と松前・蝦夷地(北海道)を往来する船があったのか？

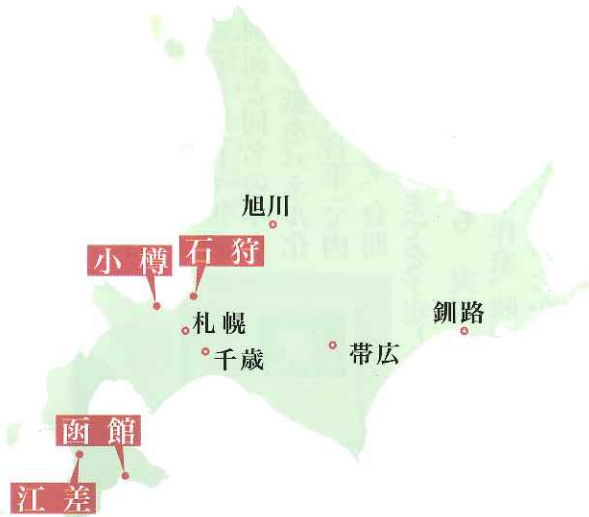
その答えは、きっぱり「ある」といえる。それを、今に残された文献から具体的に少し考えてみたい。

まず、九州に残されている文献史料を見てみよう。時代は200年以上前の18世紀後半、舞台は筑前廻船(五ヶ浦廻船)の拠点である宮浦(現、福岡市西区宮浦)。ここの直乗船頭である兵吉は、「住吉丸」という船で箱館(現、函館)から、昆布1、100石(約170トン)を積んで長崎へ廻漕していた(写真左)。特筆すべきは、この船が幕府による



「住吉丸」(史料左部分)の説明 Ⅱ 右同断(松前箱館行) 筑前宮浦兵吉船沖船頭直乗 一 同、昆布千石積 住吉丸 此廻着式拾八万五千七百八拾七斤 「俵物方書付」(初村家旧蔵峰家史料、大村市立史料館所蔵)

チャーター船(御雇船)で、中国へ輸出する昆布を、生産地(箱館)から長崎へ運搬するために利用されていた点である。



さらに同じ「住吉丸」は、他の史料にも登場する。高田茂廣氏は、宮浦の廻船問屋であった津上家の史料から箱館へ向かう「住吉丸」を紹介しているが、安永期(1772~1780)、頻繁に昆布買い入れのため箱館へ向かっている。

なぜ、輸出海産物の廻漕に筑前廻船が利用されたのか。詳しいことは不明だが、大型船を多数所有していたことや、幕府城米の江戸・大坂への廻漕に関わっていたことなどが影響するのではないかと見られる。加えて他の御雇船は、すべて大坂船で占められていたことから、「御雇船」として大坂船と同等の信頼をうけていたのではないかと目される。

次に、北海道に残された文献史料を紹介したい。松前藩の重要な湊の一つである江差に残されている、「永代御客帳」は、江差に入る船の来歴をまとめた

ものであるが、筑前廻船が数多く記載されている(『江差町史』第四巻資料四、関川家文書)。具体的には、筑前姪浜・残嶋(能古島)・今津・浜崎・唐泊りの船主と船頭名、あわせて30名余り(同族と思われるものも含む)が見られる。

中でも残嶋の前田彦十郎の船は「安永三年午四月廿日石狩材木二御下し候」、唐泊りの榎木田勘右衛門の船は「寅ノ六月石狩行」とそれぞれ説明されており、石狩川筋の材木の運搬に関わっていた可能性が高い。また、九州地方で当史料に登場する廻船が他にはない点も注目してよい。

このように、今から約250年も前に北海道と福岡が船で結ばれていた点、筑前廻船が深く関わっていた事実は、一見意外かもしれないが、海を通じた当時の国内における流通ネットワークの広さを如実に物語っている。18世紀後半以降、松前と大坂を結び日本海の流通市場を席卷していく「北前船」の主要ルートは、九州へは寄らず、下関をまわり瀬戸内海を航行すると捉えられてきたが、筑前など九州北部沿岸地域にスポットを当てて見直すと、意外な発見があるのかもしれない。次号では、この「北前船」とはどのようなものなのかを紹介したい。



菅原 慶郎(すがわら よしろう)

1987年、北海道札幌市生まれ。北海道大学大学院文学研究科博士後期課程修了(日本近世史専攻)博士(文学)。2012年から小樽市総合博物館の歴史分野担当の学芸員として、近世の小樽地域をはじめ、広く北海道や東北地方の流通経済について研究している。

共著「松前・蝦夷地における唐人貿易向け昆布の集荷」18世紀後半を中心に(和泉清司編『近世・近代の政治・経済・文化』創英社/三省堂書店、2015年)、主要論文「松前・蝦夷地における長崎俵物の集荷」18世紀後半を中心に(『北海道・東北史研究』7、2011年)など。

26年度 1、800人到達か

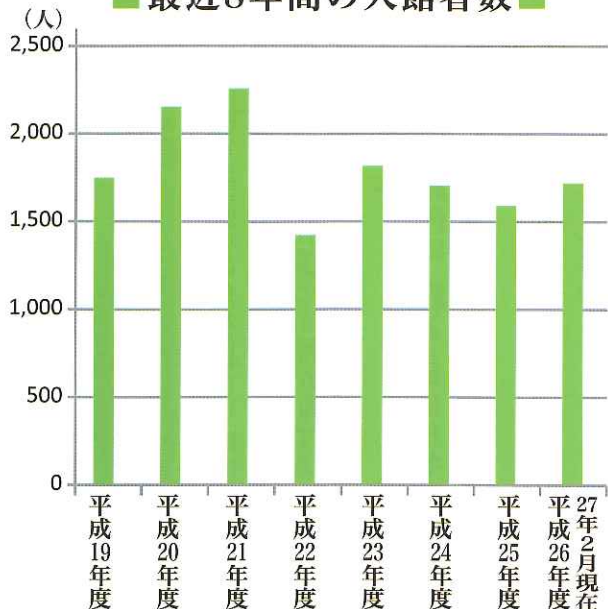
入館者数増加に転ず

最近8年間の入館者数グラフ(左)をご覧ください。お陰様で平成26年度は2月末現在で前年度を上回りました。このまま推移すれば年度末には1、800人に到達する勢いです。過去3年間の下降傾向にやつと歯止めがかかりました。

次のステップは2、000人台の回復です。開館日数にばらつきがあるので正確な比較は出来ませんが過去に2度(20、21年度)記録されています。特別企画展の開催が寄与し、天候にも恵まれました。逆に22年度は殺人事件の死体漂着が影響したの

来島者が減少、入館者数も影響を受けました。また近年は週末の天候不良が客足を引っ張っています。26年度は入館料100円引きのチラシを配布し、団体を優遇して挽回に努めた結果、増加に転じた一面があります。しかし入館料の平均値は大人1人当たり390円から310円に下がりました。

最近8年間の入館者数



日野原ホールで自主上映

第3回能古映画サークル上映会

3月21日(祝)の昼下がりに能古博物館の日野原ホール(研修室)で能古映画サークル主催の映画『99 N INETY-NINE 東勝吉99歳 孤高の無名画家』の自主上映会が開かれ、多数の熱心なファンが集まった。同サークルの上映会は2006年以来3度目。

映画は湯布院盆地の特別養護老人ホームで99歳の生涯を終えた東勝吉さんの晩年を追ったドキュメンタリー。

特別企画展開催へ

『私の8月15日・戦後七十年の肉声』展

能古博物館では戦後70周年の特別企画展『私の8月15日・戦後七十年の肉声』(仮称)の開催に向けて準備を進めています。

東京・国立市の出版社「今人舎」と「8・15朗読・収録プロジェクト」(実行委員長林屋三平さん)が

今年春と夏に分けて復刊する、前記と同名の本をもとに絵手紙をパネル化し、IT機器の「音筆」で肉声を聴く内容です。会期は7月下旬から年末までを予定しています。



今人舎制作の展示モデル(中央下の機器が音筆)

高倉健さんの肉声も 実現すれば70年前のあの日、約30人の漫画家や作家、映画監督、医師らが、どこにいたか、何を考えていたかを絵手紙と声でお伝えすることができそうです。すでに収録を終わった肉声の主には俳優の高倉健さん(昨年8月録音・同11月死去)や103歳の医師日野原重明さんがいます。

「またやつててください！」

バスツアー参加者の声

「またやつててください！」「知らないことばかり。勉強不足を痛感しました」——昨年秋、2回にわたって開催した亀井南冥没後200年特別企画「バスで巡る旧跡訪問と浄満寺でのお茶席」の参加者アンケート結果によると、初の開催はAクラスの合格点をもらったようだ。

車中の解説(吉田洋一久留米大学准教授)は「良くわかった」と好評。唐人町での寸劇や落語、昼食の弁当、浄満寺の前住職井浦順爾さん(佐賀龍谷学園理事長)の講話、表千家吉田宗修社中のお茶席など、すべてが満点に近い支持をいただいた。

改善点としては、屋外での説明がよく聞き取れなかった、弁当の量が多すぎた、参加費(3千円)は増額しても良いのではないかと、との指摘があった。

友の会新入会員の皆さん(敬称略)

井浦泰司、石橋美感行、伊勢幸裕、井上透、上野聖満、玉村英美、丸谷理奈、村上浩、森田拳次

主なグループ来館

(平成26年11月1日〜平成27年2月28日)

- ▼平成26年「11月」▽8日(土)(株)リクルーティングパートナーズ22人▽16日(日)板付北青少年育成連合会26人▽21日(金)九州大学農学部4人▽26日(水)(株)電通九州OB歩こう会10人▽29日(土)姪浜「亀井南冥の生涯と学問」講演会終了後の当館訪問9人
- ▼平成27年「2月」▽20日(金)佐賀県立名護屋城博物館のボランティア組織「名城会」一行17人



アクセス

西鉄バス

- ・JR博多駅 博多口正面Aのりば
300、301、302番 能古渡船場行:約50分
- ・天神 三越前1Aのりば
300、301、302番 能古渡船場行:約30分

市営地下鉄:「姪浜駅」下車 乗り継ぎ

- ・西鉄バス姪浜駅 北口
98番 能古渡船場行:約12分
- ・タクシー:約 8分

市営渡船(フェリー)

- ・姪浜一能古島間:約10分
- 能古島渡船場より博物館まで
- ・徒歩:約10分
- ・アイランドパーク行き西鉄バス停
「能古学校前」下車、徒歩(下り坂)約3分

問合せ

姪浜旅客待合所 TEL 092-881-8709
能古旅客待合所 TEL 092-881-0900

	能古 発	姪の浜 発
1	◎05:00	◎05:15
2	06:00	06:15
3	06:30	06:45
4	07:00	07:15
5	07:30	07:45
6	08:00	08:15
7	09:00	09:15
8	10:00	10:15
9	11:00	11:15
10	12:00	12:15
11	13:00	13:15
12	14:00	14:15
13	15:00	15:15
14	16:00	16:15
15	17:00	17:15
16	17:30	17:45
17	18:00	18:15
18	18:30	18:45
19	19:30	19:45
20	20:15	20:30
21	20:45	21:00
22	21:45	22:00
23	◎22:45	◎23:00

◎印は日祝日運休 2013年11月現在

開館日/毎週 金曜・土曜・日曜と祝日

※団体の場合は休館日にかかわらずご相談ください

(注) 冬季(12月~1月)は、年末年始及び展示物入れ替えなどで長期休館を原則としていたす。御用の場合は事前にお問い合わせ願います。

開館時間/10:00~17:00(入館16:30まで)

入館料/大人400円・高校生以下無料
※団体20名以上2割引

渡船場からアイランドパークへの西鉄バス時刻表(平成27年3月現在)

渡船場前発(能古学校前まで約2分)

時	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	18
平日	57	48	45	30	30	55	35	35	35	45	
土曜日	57	48	45	30	30	55	35	35	35	45	
日・祝日	57	48	45	30	30	55	35	35	35	45	00

アイランドパーク発(能古学校前まで約8分)

時	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18
平日	23	20	3	13	28	18	18	18	18	28	
土曜日	23	20	3	13	28	18	18	18	18	28	
日・祝日	23	20	3	13	28	18	18	18	18	28	38

※ 繁忙期はバス、渡船とも臨時便が運行されます。



公益財団法人 能古文庫

能古博物館

〒819-0012 福岡市西区能古522-2 TEL 092-883-2887 FAX 092-883-2881
http://nokonoshima-museum.or.jp E-mail info@nokonoshima-museum.or.jp